

時計屋

yamamomon

今日、時計屋に行った。
初めて春が来た日曜日だったから。

…ああ、そうだった。春って、こんなだったんだ。

朝、窓を開けて、私はつぶやいた。こんな風に、曖昧に柔らかくけぶった甘いそらいろの空。暖かくほんのりとした気配。白い水仙の香を含んだ風。幾度も繰り返された、この古い懐かしさ。

春の始まりの日曜日。毎年、まるで生まれて初めての季節に出会ったかのように、私は新鮮に驚いてしまう。そうだ、これは、大切な「始まりの日」なのだ。

…そうして、私は、春の時間を探しに出かけることになる。

朝から、ちゃんとシャワーを浴びる。お洒落なかささぎみみたいに、丁寧に身づくろいをする。神妙な面持ちで開く、衣装ダンス。ほんのりふわりと甘い、特別の春服を探すのだ。

春霞のかかった、スイートピーみたいな色、ふうわり風をはらむ、柔らかなシフォンのワンピース。うん、これがふさわしい。

ちゃんとした「春の時間」を得るためには、始まったばかりの春を、しっかりと自分の中に捕まえて、そうして、十分にふくらませておかななくてはならない。

もちろん、春を迎えるための香りも、重要だ。朝露を含んだ、咲きたての、白い花の香りがいい。…いくつかの香水壺をためつすがめつ吟味して、かろやかな、春の花を集めた香りを、ひとつ、選ぶ。クリームみたいに甘い優しい水仙、ジャスミンのように華やかな蠟梅、凜と清々しい沈丁花、初夏を夢見る檸檬の花…

気持ちをね、来るべき春へ歓びと感謝、敬意をいっぱいにしておくんだよ。

この部屋は、海辺の港町を見下ろす、丘の上の住宅街にある。

晴れた朝、窓の遠くには、水平線が薄い銀に光って見える。その手前には、ぽってりと明るい小麦粉粘土を盛り上げたような丘の斜面。へたくそな粘土細工のように、煙突付の家がぼてぼてと並んでいる。桃色やレンガ色。壁や屋根に、絵の具を塗りつけた、昔の遊園地みたいな色彩感覚だ。

春、春。春が来た日。

春になれば、私は、このまぶしい窓をタプロオのように壁に飾ることができる。そうして、その光の中の朝食に、香りのよい花のお茶、春の柔らかい菜っ葉、摘みたての苺を並べることもできる。

今日の窓は、パステル画。朝の光の金粉にまみれて、まるで昨夜の夢でこしらえた、おもちゃのような街並みが、ぼうと浮かんでいた。

その迷路のような街並みの中へ、これから私はおりてゆく。新しい、春の時間を買いに行く。静かな日曜の朝の、黄金色の泉の水みたいな空気。新しい光に、まず素足をひたし、それから、ぶるんと気合をふるって、全身、入り込んでゆくのだ。

考えただけで、うふふふ、と、おなかのあたりから、くすぐったい笑いがこみあげてくる。懐かしい時間の中へ還ってゆくような、新鮮で甘やかな、焼きたてパンの香りのような、その感覚。

…何しろ、新しい季節の始まりは、特別なのだ。

この街の日曜は、朝、とても平和で、静かだ。もうかなり高くなったミモザの色の陽射し。その中に、まだ、週末の陽気な夜遊びの余韻が、ほのかに漂っている。

昨夜も、いつものように、街は夜通し歌や踊りの大騒ぎだったのだろう。とろとろと、朝の金色の眠りの中、静まり返った白い街。ぶどう酒色に澄んだ甘い空。曲がりくねった坂道の、迷路みたいな細い路地。

このくねくね道を、一人、ゆるゆるとくだってゆくのは、格別な気持ち。

時折、子供の遊ぶ声が響いてくる。白い漆喰の塀のどこか向こう。

とろりとぬるみかけた風が吹く。やっぱり粘土をこねあげて5分で作りあげたような、ぽってりまるいポストは、オリーブ色。輪郭が粉っぽい陽射しに染まってしんとしている。（ああ、そうだ、春の便りも出さなくっちゃな。）おろしたての、柔らかなキッドの靴も、春の新芽の色だ。

その靴が、嬉しくてならないかのように、踊るように軽く、歩く、歩く。…そしてやがて、重なり合う海辺の白い貝殻のような建物の間から、突然、濃く青い海の色が目飛び込んでくる。その曲がり角のところには、小さな巻貝のかたちをした、くすんだ琥珀色の看板。

「時計屋」

時計屋には、いつもの親父がいた。

店の奥のカウンターで、何やら難しい顔をして、古い書物を読んでいたが、私が戸を開けると顔をあげ、眼鏡越しにこちらを見た。

「おっ。あんたか。…うんうん、今日は、春が来た日だからな。そろそろ来る頃だと思ってたよ。まあ、じっくり選んでってくれや。昨夜のうちに、たくさん、新しい『春の時間』がとどいたからな。」

それじゃあ、と私は胸のわくわくを抑えながら、明るい海の広がる大きな窓際の、小さな飾り棚を覗き込む。

少し心の準備をしてから覗くのだが、やはりまず、視界がゆらんと揺らめく。いつものように、さまざまな、不思議なフォルムの洪水が脳髄を襲う。幻想的で、透き通るような質感。変幻自在な光の色を映した、素晴らしい時計たち。生き物がうごめくようなフォルム、ガウディの建築物みたいな柔らかなカタチのもの、鉱物的な、くすんだ色と結晶のかたちをもつもの、地球の芯の熱い炎を内に秘めた輝き、とろけた半透明のガラス質…。あらゆる世界の物質の夢の凝りが、無造作に並べられ、営々と各々の時間を刻んでいる。

胸が、ぎゅっと痛むほどに、モノに対する新鮮な驚きの感覚がよみがえる気持ち。意味の存在の有無など問う必要のない、モノそのものでいっぱい場所。寡黙で、豊かな世界の存在のメッセージ。ただ、嬉しい。ただ、美しい。忘れていた何か、命のエネルギーの存在を指し示す。

ここは、いつもそんな喜びが湧き出してくる場所なのだ。

品揃えとしては、殆どが腕時計や懐中時計だが、手のひらにすっぽり収まるくらいの小さな目覚まし時計くらいはある。それから、壁から生え出してきた銀の蔓草みたいな、曲がりくねった形の掛け時計。

だが、今日の私のお目当ては、店の隅っこの、ガラスのショー・ケースだ。特別美しい、儂い花びらみたいな「季節の時計」が、宝石のように大切に並べられている。

「ねえ、おじさん。ずっと聞きたいと思ってたんだけど、ここの時計は、一体どこの、どんな時計職人が作ってるのかしら。」

思い切って、聞いてみた。

そうだ、ふらりと歩いていて、初めてこの時計屋にめぐりあったとき、数年前の春の宵。あの日から、いつか聞こうと思いながら、何となく聞きそびれていた。

季節が変わると、私はここに来て、新しい季節の時間をひとつ買い、ポケットに収めて帰る。その帰り途は、あたたかく、わくわくした気持ちの中に、いつも聞きそびれてしまった、忘れ物をしてしまったみたいな気持ちが、ちょっぴり混ざっていた。

親父は、ちらりところらを見て、しばらく考えるふうな表情をみせた。その瞳が、妙な緑金色の、蒼い光を帯びているように見えた。…なんだか、ちょっとどきどきした。これは、マズいことを言っちゃったのかしらん。

けれども、その永い一瞬の後、親父は、にっときれいな歯を見せてこう言った。

「まあ、あんたになら、そろそろ教えても大丈夫かな。お得意さんだしなあ。」

やった！ 言ってみるもんだ。

こんな時計をつくりだす時計職人って、一体どんな人たちだろう。どんな風に作っているのだろう。…きっと、小さくて、素晴らしく居心地のよい、小さな暖炉が似合うような森の丸太小屋みたいな工房に違いない。そうだ。大きな窓から、素敵森の景色なんかが見えて、時計に命を吹き込むような、金色の陽射しが、一日をゆっくりめぐる…。私は、勝手に想像を膨らませた。だって、こんな素晴らしい時計が、つまらない工場の流れ作業でできるわけがないもの。メーカー名もなく、サインみたいな印が刻まれているだけだし。

…大体、ここの時計は、普通じゃないのだ。並外れた造形的な美しさだけではない、秘密がある

。

(時計を買った日から、決まって、決まった夢を見るのだ。)

(季節が変わるまで。)

「うわ。」

時計屋にうながされるままに、裏口を通り抜けた私は、驚いて声をあげた。